

改 南朝以来地震抄録【意識】

(表紙)

(多田家文書)

南朝以来地震抄録

【註】

【前略】

後醍醐帝の御代、正中元年(1324)甲子十一月二十一日、大地震が発生。竹生島は崩れて湖の中に半分ほど埋もれてしまった(『和漢合運』より)。

竹生島(ちくぶじま)

琵琶湖の北部にある島。

正中二年(1325)、大地震(『日本史』より)。

元弘元年(1331)辛未七月三日、諸国に大地震が起こった。紀伊(現・和歌山県)日高郡千里浜に二十余町の土地が現われた。七日また地震があった。

富士山は数百丈崩れた(『日本史』より)。

(昔から地震により山が崩れ川を塞ぐことは少なくない。しかし山岳が崩壊せずに海辺にいくつかの土地が増えている。これは地中で土壌が噴起してなのか、あるいは隣りの島洲が陥没して、その砂石が海の波に運ばれて増えたのかわからないが、海辺の土地の急激な増加は、この二つのどちらかによるのではないかと思う。)

その昔、白鳳年(七世紀後半)に土佐(現・高知県)に大地震が起こり、五十万頃の土地が陥没した。その夜、伊豆島の西北に三百余町の土地が急に隆起した。土佐と伊豆

白鳳(はくほう)年

七世紀後半、天武・持統天皇時代の称。

は百五、六十里ばかり水路を距<sup>へだ</sup>てている。それでもなお、このような有様<sup>ありさま</sup>と聞く。

その昔、阿波(現・徳島県)の海部<sup>かいふ</sup>のあたりに洲が二つあり、それぞれ千軒ばかり民家があった。しかし五百年前海水が溢<sup>あふ</sup>れ陥没したという。この二つの洲から日高郡(和歌山県)まで西と東に、わずかに十数里を隔<sup>へだ</sup>てているだけである。

また元弘元年(1332)より現在の安政乙卯2年(1855)まで約五百二十五年になる。これは土地の人の説だと思<sup>う</sup>が、海部の二つの洲が陥没して、日高郡千里浜の土地が増<sup>か</sup>えたとは、彼の日高郡の人達は知るはずもないだろう。後<sup>のち</sup>の考証を持つのみである。

また、富士山は今でも峯がほとんど大空に迫るほど雄大であるが、この地震の前はさらに高大であったと思<sup>う</sup>。

延元三年(1338)戊寅七月十九日、大地震。

二十二日、また地震。

後村上帝の興国六年(1345)甲申八月十七日、京都地震。

正平二年(1347)丙戌五月六日、京都大地震。

正平五年(1350)五月二十日、京都大地震。

二十三日、また大地震。

二十五日、また大地震。

二十八日、京都大<sup>大</sup>水害。

二十九日、京都地震。

六月十日、また大地震(以上『日本史』より)。

正平五年(1350)六月二十二日、また大地震(『康富記』より)。

正平五年(1350)は、六月に五度地震があった。

十二月、京都地震。

正平六年(1351)二月十九日、京都に大地震が発生。その時將軍塚が鳴り動いた。

六月六日は冬のように寒かった。

五十万頃(けい)

頃は古代の面積の単位。  
一頃は一〇〇畝<sup>ぼ</sup>。

十一月十九日、京都は何回も地震に見舞われた。

正平十一年(1356)七月三日、京都大地震(以上『日本史』より)。

正平十二年(1357)四月十日、地震発生。それから毎日地震が止まなかった。嵯峨釈迦五大尊なども倒れた。

十五日は何回も地震があつた(『康富記』より)。

正平十三年(1358)五月二十四日、京都大地震。

九月四日、京都大地震(『日本史』より)。

正平十五年(1359)六月、全国に大地震が発生した(『本朝通記和漢合運』より)。

正平十六年(1361)六月二十日(『太平記』では十八日とある)大地震が起こり、阿波の雪港は津浪に襲われ、民家は一千七百軒ほど海に流され沈んでしまった(『日本史』より)。

『太平記』には「雪港の浦」とあるが、雪港とは由岐浦のことだと思ふ。

昔この由岐浦を津浪が襲<sup>おそ</sup>い、土地が陥没して今のようになつたと聞いたことがある。西由岐はその時原野となり、生き残つた人々はその荒れ果てた土地を開拓して移り住んだ。

その時以来、東西に分かれ、今この由岐の民家はわずか三百五、六十軒だけである。正平の時代より今まで五百年余<sup>あま</sup>り、住民は懸命に働きつづけ、人口や家数が増え、なおこの軒数である。一千七百軒余<sup>あま</sup>り海に流され沈んでしまったというが、これはこの地方の戸数の総計ではないかと思う。ただ「雪港」というのは、それほど由岐浦の被害は大きかったので、由岐浦の名が表に出たのではないだろうか。

近年では嘉永七年(1854)、この浦々は津浪に襲われ、海に沈んだ民家の総計は、これもまた一千七百五軒であ

る。正平の時の被害の軒数と一致している。不思議なことである。）

正平(1361)六月二十一日、京都大地震。

二十二日、京都は雨や雪が降り、人や家畜は凍<sup>こ</sup>え死んだ。

二十四日、京都大地震。

二十五日、また大地震。

二十五日、また大地震。四天王寺金堂、及び南都(現・奈良県)の多くの社寺が壊れた。

七月三日 また大地震。

二十四日、また大地震。難波浦は潮が引き、またすぐに潮が押し寄せて、数百人の死者が出たという。

阿波の鳴戸(鳴門)は潮が引き、石の上に巨大な鼓のようなものが見えたという(以上『日本史』より)。

(鳴門は阿波と淡路の海門であるが、天下に名高い危険な海峡である。山陽と讃岐(現・香川県)の潮流がここに集まり、深い淵に渦を巻く。紀州(現・和歌山県)や摂津(現・大阪府と兵庫県の一部)、播州(現・兵庫県西南部)、淡路と阿波の南部の潮流がここに集まり、ここ鳴門において流し落とす。

私は昔、八月に瀬戸内海を視<sup>み</sup>る機会があった。その水の状態はもちろん他所の役には立たないが、海面の上昇する様<sup>さま</sup>は、本当に他所の水が涸<sup>か</sup>れてなくなるような勢いであった。

また正平以後、難波(現・大阪市とその付近)は数えられないほど何回も津浪に襲われたが、海面が減少して涸れたことは一度もない。

嘉永七年(1854)の大地震の時は、難波や阿波の由岐浦などは津波に襲われたが、その時鳴門近辺の海面の高さ

は、普段の時より四尺(1.2<sup>2</sup>)ほど減少しただけである。  
難波の津浪は、鳴門の潮が引いたのとは関係のないこと  
は明らかである。これは史家の記録にある。つまり別記  
とは異なると思う。)

【中略】

後柏原帝の御代、永正七年(1510)庚午八月七日、大地震(『和漢合運』『年代記大成』)。

同年八月八日、明け方に大地震発生。河内(現・大阪府)藤井寺の伽藍は残らず破壊された(『観音冥応集』)。

同年八月二十七日、遠江(現・静岡県西部)今切は崩れて海となった(『和漢合運』・『年代記大成』・『吉田光由年代記』みな同じ)。

(この地崩れは地震のためかどうか判然としないけれども、後の考証のために併記する。)

永正九年(1511)六月九日、大地震(『吉田光由年代記』より)。

同年八月、阿波国海部郡穴喰浦に大津波が発生した。民家は流され沈み、男女死者は約三千七百人(『穴喰浦旧記』より)。

(本当に八月なのだろうか。八月は六月の誤りではないのだろうか。この大津波は地震のためなのか、そうでないのか未だに判らない。)

この永正九年(1511)は地震があり、また津浪も発生し

※今切は浜名湖が外洋に通じる湖口部。

浜名湖はかつては砂州によつて海とは閉塞されており、浜名川という小河川が海と通じていたが、明応7年の地震の時の津浪、永正7年の高潮などで砂州が崩壊して外洋とつながった。その切れた箇所を今切と呼んだ。

た。宍喰の津浪のことは『水郷叢話』に詳細を記す。

後奈良帝の御代、弘治(1556)二年丙辰二月十三日、大地震。  
弘治三年(1557)七月二十日、大地震(『年代記』より)。

永祿六年(1563)癸亥七月十四日、淡路慶野(南あわじ市松帆慶野)大地震(『淡路草』より)。

天正六年(1578)戊寅九月二十八日申時(午後4時頃)、大地震(『家忠日記』より)。

天正十二年(1584)十一月二十九日、大地震。年を越して翌年まで地震が続いた(『享祿已来年代記』より)。

天正十三年(1585)七月五日、大地震(『家忠日記』より)。

同年十月二十九日、大地震。年を越して翌年まで地震が続いた。(『和漢合運』、『年代記大成』、『吉田光由年代記』には十一月とある)。

(この兩年の地震は同月同日同事であり疑わしい。年月を誤って記載したのではないかと思う)。

また横井氏の『阿波奇事雑話』によると、宝永四年(1707)の地震は、蜂須賀氏が入国した天正(1573～1592)頃の地震以来、いまだかつてないほどの地震とされている。これは天正十三年(1585)のことか、未だに判然としない。

近頃聞くとところによると、阿波南部の海部の住民の説には、天正の頃に津浪で陥没した島洲があちこちにあるそうである。沈んだ者の恨みの遺跡は判然としないので調査するべきである。

徳島城下の東南の近海に、お亀島の暗礁の伝説がある。

### 家忠日記

〔著〕徳川家康の家臣、松平家忠の日記。

〔成〕天正5年～文祿3年。

※昔、猪山をさる3里ばかりの東海中のお亀島という小島に、小さな銅の鹿が祭られていた。

銅の鹿の面赤らめば、この島滅亡なりとの予言を信じて、老夫婦は銅の鹿を舟に載せ、福島に遷座し、難をのがれたが、村

大昔、お亀島という小島があった。この島には千軒の家があるというところから、俗にお亀千軒と言われている。一日にしてその島が陥没してしまった。

その島の子孫が四家あり、徳島城下の東の筑地(現・徳島市南福島町)に住んでいる。

また四社<sup>ししよみょうじん</sup>明神(四所神社。現・福島2丁目)は、その沈没した洲の中の祠<sup>ほこら</sup>を遷座<sup>せんざ</sup>したものである。一の銅<sup>あかがね</sup>の鹿は昔から伝えられた物であると思われる。

よってこの洲の陥没は、まさに蜂須賀氏が入国した天正の頃であろうか、なお後の考証を待つ。

-----  
【中略】  
-----

慶長九年(1604)十二月十五日、南海は鳴り動き、大波が押し寄せ、八丈島のそばに一夜にして島が出現<sup>しゅっげん</sup>した(『享禄已来年代記』と諸書より。『家忠日記』は十年と記載あり)。

翌十六日巳時<sup>みのとき</sup>(午前10時頃)、阿波国海部郡に津浪が襲いかかり、数<sup>かず</sup>え切れないほど多くの民家が流され沈んだ。

阿部浦	八十人	溺死者
由岐浦	十六人	同
木岐浦	十五人	同
牟岐浦	十人	同
鞆浦	七十人	同
宍喰浦	千五百余人	同

(この時南洋は鳴り動き、海中に山が勃起<sup>ぼつき</sup>し、阿波の南部の浦々は津浪に襲われ、民家は流され沈み、多くの人が死んだ。

民の多くはこれを信ぜず溺死したという(『日本伝説叢書阿波の巻』)。

※四所明神は、もと大亀島に鎮座していたのを大同年間(806～810)に現在地に移したとも、文禄年中(1592～1596)島が沈んだため移ったともいう(『阿波志』)。

※現在、徳島港沖合約2キロの所にお亀の磯と呼ばれる小さな岩礁があり航路標識の灯台が建っている(平凡社『徳島県の地名』)。

※慶長9年の地震と翌年の八丈島の噴火を筆者が混同している可能性が大きい。

そのほか土佐(現・高知県)や紀伊(現・和歌山県)より東の海岸線の国、例えば伊豆や相模(現・神奈川県)のような国でも災害の記述は見えない。記録が失われてしまったのか。

慶長十九年(1614)十月二十五日曇り。申時まる(午後4時頃)大坂に大地震が発生。神社や仏寺などが破壊され、多くの民家が倒れた(『難波冬夏軍談』より)。

寛永二年(1625)乙丑二月、奥陸(現・青森県と岩手県の一部)の山々は鳴り動いた(『年代記大成』より)。

同四年(1627)正月二十一日、大地震(『王代統一覧』より)。

-----  
【中略】  
-----

宝永三年(1706)九月十五日夜、江戸大地震(『並続王代一覧』より)。

同四年(1707)十月四日午時(午前12時頃)、東海道諸国に大地震発生。海辺の国々は地が裂け、津浪が襲い、多くの死者が出た(諸書より)。

同年、阿波と淡路に大地震発生。津浪に襲われ、家は流され沈み、人は溺れ死んだ。田地は破損し、堤防や石壁は崩れ壊れた(『渭水聞見録』より)。



(貼紙)

二年四月二十日、阿波城下近郊で大地震発生  
(『中村氏日記』。翌年阿波の国を離れた)。

十月十六日、宍喰浦の津浪は、嘉永七年より

三尺(約90センチメートル)高かった。

宝永四年(1707)丁亥十月四日午の刻(午前12時頃)、大地震発生。

**五畿内**(現・奈良県と京都府南部と大阪府付近)と**南海道**(現・和歌山県と淡路島と四国)が揺れた。

とりわけ摂州(現・大阪府と兵庫県の一部)や紀州(現・和歌山県)、および三河(現・愛知県東部)や土佐(現・高知県)は激しく揺れ、海辺の大地は津波で流され沈み、死者は数えられないくらい多い。そのうちでも京都の揺れは大きくなかった(『年代皇記』)。

木岐の岡田氏の筆記には、宝永四年(1707)十月四日九時(午前12時頃)に地震発生。半日ぐらいのあいだ、繰り返し間をおいて揺れが続いた。大潮が家に入り、船は残らず流され、大網や小網は全部流れてしまった。  
伊座利・阿部・志和岐は潮水が少し入っただけで、死者は出なかった。

東由岐	四人	死亡
西由岐	三十四人	死亡
大井村	一人	死亡
木岐	九人	死亡
日和佐	一人	死亡
牟岐両浦	八十七人	死亡
浅川	百二十九人	死亡
宍喰	十六人	死亡
恵比須浜	四人	死亡
合計	百八十五人	死亡

津浪が襲ってきた時、沖合にいた漁船などに被害は少しもなかった。流された網具などの買い入れ金は被害の

**五畿内**(ごきない)

大和(現・奈良県)・山城(現・京都府南部)・河内(現・大阪府東部)・和泉(現・大阪府南部)・摂津(現・大阪府と兵庫県の一部)の5カ国。

**南海道**(なんかいどう)

紀伊(現・和歌山県)・淡路・阿波(現・徳島県)・讃岐(現・香川県)・伊予(現・愛媛県)・土佐(現・高知県)の6カ国の称。

合計は285人になるが、本文は185人と記載あり。

あつた浦々へ、魚請所(鮮魚の関税を徴収する税関)から一口五年半の間<sup>あいだ</sup>出され、そのお陰で網具や船を買い揃えることが出来た。この地震で、大地が二、三尺(約60〜90センチメートル)沈下したように思うとある。

数え切れないほどの地震(余震)があつた。宝永六年(1709)夏まで少しずつ揺れて止まなかつた。

吉成某の筆記には、宝永四年(1707)亥十月四日晴天。この年は帷子<sup>かたびら</sup>(裏を付けてない、ひとえの衣服)を着るほどの暑さだつた。昼八つ時分(午後2時頃)に大地震が発生した。五、六寸(約15〜18センチメートル)、あるいは一、二寸(約3〜6センチメートル)ほど地面が割れた。

同日八つ時過ぎから津波が襲つて来た。蜂須賀藩のお歴々の家柄の息子達は<sup>だいしやう</sup>大小の刀を指し、<sup>ながなた</sup>長刀を振り、警備に廻り、<sup>ずいがんじやま</sup>瑞巖寺山や<sup>せいみやま</sup>勢見山大理、そのほか、その土地々々の山へ登り、夜は<sup>ちやうちん</sup>提灯をつけた。

地震は明るる年、宝永五子年(1708)の八、九月まで少しずつ揺れた。

徳島城下以外では多数の死者が出た。大坂では約二万人の死者が出たと聞いた。

吉成某は大坂へ船の櫓木<sup>ろぎ</sup>などの購入に<sup>つか</sup>遣わされ、徳島を十月三日に出帆した。坪井平右衛門も大坂の御用に<sup>つか</sup>遣わされ、吉成と坪井は同船し、四日兵庫一谷で大地震に遭遇した。津波は一、二里(約3.9〜7.8キロメートル)沖では潮が早く来た。

その地震で福地庄九郎家や小原只右衛門家、飯田理右衛門家は崩れた。小室平六家は高さ二丈(約6<sup>メートル</sup>)ほどの杉の木が三本地中へ入り、掘ってみたけれども、見えなかつたという。

内々の話では、福地家他四家は前川の埋立地であるから、このようになったそうである。

津波とはいっても、府下(徳島城下)は人家も崩れるほ

※宝永四年(1707)亥十月四日は、太陽暦では10月28日である。

瑞巖寺(ずいがんじ)

現・徳島市東山手町。

眉山の東山麓の端。

勢見山(せいみやま)

徳島市西二軒屋町の市

街地西側にある山。

眉山の一部。山中に忌

部神社・金比羅神社が

あり、北の麓に観音寺

どのことはなかったと思う。また、ある人の話では、この時地中から出た魚を食べて、その毒に中あたったという。このような時には地中より出た魚は食べるものではない（『吉井弟氏筆録』より）。

また、宝永四年（1707）十月四日昼九ツ半（午後1時頃）に大地震発生。一時いつとき（今の2時間）ばかり後、沖のちより大津浪が押し寄せて来た。

新町川筋の七、八合には、夜五つ時（午後8時頃）までに津浪が七回押し寄せて来た。

また、矢三川やそがわの田地には、流された多量の材木が押し上げられていた。

この地震により、あちこちの田地に亀裂が入り、土砂が吹き出たり、所によっては一反、二反が一つになってしまった所もある。

その時、「津浪が陸に押し寄せて来るぞ。」と言って、飯米を袋に入れ、御家中の武士や町人、百姓などは山々へ走り登り、その夜は山で夜を明あかした。

その後四、五日のうちは度々たびたび山へ走り登った。

「大浪がすぐに来るぞ。」「後から来るぞ。」とたいへんやかましく、この四、五日の間は夜になると、人々は仮家で夜を過ごし、鼠の音にも驚いて、「それっ。」と言つては駆け出し、肝をつぶしていた。

南方の海辺はその大津浪で家が流され、二百人ほど死亡者が出た。

徳島城下および地方の蔵の備えは充分にあった。

大坂は多くの家が潰れた。死者は家の下敷きになったり、川で死んだ人が多い。その人達は二万人余りである。地震を恐れて川船に乗って逃げていたところに、沖から大津浪が来て、大船や材木が押し寄せ、川船は残らず沈んでしまったので、陸よりは川の方で死んだ人が多かった。

その秋の八月と九月には、十三回の大風雨があったと

いう(これは『〇〇筆記』より)。

一説には、大坂は宝永四年(1707)十月四日うまのとき午前(午前11時〜午後1時)に西南の方より揺れ出し、西横堀や伏見堀、立売堀、南堀江、心齋橋と南から北へ残らず崩れた。西横堀通りも残らず崩れ、そのうえ沖が鳴り動き、大津浪が逆登りさかのぼ、大船の帆柱で橋も打ち落し、道頓堀や日本橋まで大船が押し寄せ、安治川も同じように大船が押し寄せた。

四日より同二十五日まで、毎日大地震が揺り、家や蔵の破損は大きかった。

北組	五百七十九軒	倒壊
	約二百七十八人	死亡
南組	三百十四軒	倒壊
	三百四十五人	死亡
天満組	百六十八軒	倒壊
	百十一人	死亡
合計	千六十一軒	倒壊
	約七百三十四人	死亡
	負傷者数	多数あり。

崩壊した橋数	五十
流失や破損した船舶	大小千三百余艘
倒壊した家屋	六百三軒
溺死者	七千人余り

(『〇〇筆記』に「二万人」とあるのは、虚数であると思う。三組の死者の合計は七百三十四人であり、それと合わせて溺死人の数は七千七百三十四人である。倒壊した家数は、三組の他に六百三家であるから、約一千六百六十四軒である。)

宝永四年(1707)十一月二十三日、富士山麓須走すばしりの近辺で大噴火があり、雷のような音がした。近国では大地震が発生。江戸は昼なのに真っ暗になり、夜のようにだった。二十五日曇り、空から砂が降ってきた(『続王代一覽』より)。

-----  
【中略】  
-----

文化元年(1804)六月四日、出羽由利郡本庄村で大地震発生(『続々王代一覽』より)。

同五年(1808)四月二十三日寅時(午前4時頃)、江戸大地震(『続々王代一覽』より)。

-----  
【中略】  
-----

文化七年(1810)正月一日、佐渡大地震。数日間揺れが続いた。

同九年(1812)十一月四日、江戸及びその近国で大地震発生。神奈川程カ谷は特に被害が大きかった。民家は倒れ死者が多く出た。

同十一年(1814)十月十一日とりのとき西時(午後6時頃)、阿波地震。

文政二年(1819)己卯六月十二日、京都や伊勢(現・三重県)、

須走(すばしり)

現・静岡県駿東郡小山おやま町。

※宝永4年(1707)11月23日富士山大噴火し、山腹に宝永山を生ずる。

美濃(現・岐阜県南部)など大地震。

同四年(1821)七月二十一日巳時(みのとき)(午前10時頃)、江戸麻布大地震。

同五年(1822)閏正月(つるう)十六日夜、奥蝦夷(現・北海道)に大地震発生。十九日までに約百五十回余り揺れる。同時に信濃(現・長野県)水内郡の山々、及び善光寺付近は噴火した。黒煙が充満(じゅうまん)し、火の光が真っ赤に焼けて輝いた。遠くや近くで大地震発生。数十里まで鳴り響いた。人々は恐怖に駆られた。

※有珠山がこの直後に噴火。

同九年(1826)七月二十一日、江戸及びその近国に大地震発生。

同十一年(1828)八月九日、九州や中国地方に暴風雨。地震や津浪で城壘は破壊された。家々は毀れたり、流れたりした。官船や筒舟、夷舶(外国の船)などは陸地に打ち上げられ、流された人も多かった。人や家畜の死傷はあまりに多くて記すことができない。

肥(現・熊本県・佐賀県・長崎県)筑(現・福岡県)豊(現・福岡県・大分県)の前後、長門(現・山口県西北部)や周防(現・山口県東部)など特に被害が大きかった。同時に阿波は大風雨に見舞われた。

【中略】

天保七年(1836)二月九日、江戸大地震。

十五日 地震。

十八日 江戸大地震。

三月二日夜、また大地震(以上『王代一覽』追加)

同八年(1837)五月、阿波大地震。

【中略】

嘉永七年(1854)六月十四日夜丑時(午前2時頃)、伊賀(現・三重県西部)や伊勢(現・三重県)、大和(現・奈良県)、近江(現・滋賀県)、摂津(現・大阪府と兵庫県の一部)、越前(現・福井県東部)など大地震が発生。伊賀と伊勢と近江は特に被害が大きかった。

嘉永7年(1854)11月27日  
改元して安政元年となる

【中略】

阿波では同時刻に三回地震に見舞われた。

【註】は徳島市『徳島市史別巻 地図絵図集』、平凡社『日本歴史地名大系37徳島県の地名』、『日本歴史地名大系22静岡県の地名』、角川書店『角川日本地名大辞典36徳島県』、高田豊輝編『阿波近世用語辞典』、藤沢衛彦編『日本伝説叢書 阿波の巻』を参考にした。

★原文書は徳島県立文書館所蔵 西野多田家文書「南朝以来地震抄録」(ニシノ00433)である。

意訳 徳島の古文書を読む会会員 谷 恵子